

人々はイタコに何を求めるのか (2)

——東日本大震災と青森からのメッセージとしてのイタコ——

What do people expect from *Itako* (Japanese Shamans)? (II)

The Connection between the Great East Japan Earthquake and *Itako*, who is the Symbol of Messages
from Aomori Prefecture

原 英子*

Eiko HARA

Keywords : the Great East Japan Earthquake, Healing, Volunteer,
東日本大震災、癒し、応援公演

はじめに

『もしイタ〜もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら』(畑澤聖悟¹)は、青森県立青森中央高校演劇部が、宮城県、岩手県、青森県で被災地や被災者を元気づけるためにおこなってきた「被災地応援公演」での演劇タイトルである²。青森中央高校は、この演劇で被災地を巡る応援公演をしながら、高校演劇部の大会で勝ち抜き、青森県の地区大会、県大会、東北ブロック大会へとすすんだ³。東北ブロック大会で

は最優秀賞を受賞し⁴、2012年8月の全国大会の出場をきめた。

脚本を書いた演劇部顧問の畑澤聖悟教諭によると、タイトルは、岩崎夏海の『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』のパロディで、既成の作品のイメージを借りることで作品に親しみやすさを出すという狙いでこのタイトルにしたのだという⁵。

東日本大震災で、被害を受けた東北地方。青森の演劇部の高校生たちが、青森からの応援だということを伝えたくて、イタコを題材とした演劇にしたのだという⁶。生徒たちにイタコのことをきいてみると、イタコことは、この演劇をする以前から知っていたという⁷。

この「青森メッセージ」としての演劇に、イタコがどのように描かれているのか。現代に描かれるイタコをとおして、人々はイタコに何を求めているのかという点を取り上げてみたい。

1. 東日本大震災と青森からのメッセージ ：青森中央高校の被災地応援公演

『もしイタ〜もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら』は、被災地での公演を念頭においてつくら

25日、『河北新報』2011年11月24日より)。

⁴ 第44回東北地区高校演劇発表会(2011年)というのが大会の名称である(『東奥日報』2011年12月20日)。

⁵ 渡辺源四郎商店店主日記から

(<http://nabegen4ro.exblog.jp/15765841>) 2012年1月22日閲覧

⁶ 青森市の八甲田丸で、東北地区最優秀賞の受賞と被災地応援公演の報告会での演劇部員による報告と、畑澤教諭の話から。

⁷ 高校生がイタコを知っている理由として、伝統的な習俗として知っていたということのほか、近年のパワー・スポットブーム、スピリチュアルブームなども考慮しなくてはならないだろう。

* 国際文化学科

¹ 畑澤聖悟は、現在青森県立青森中央高校の美術教諭。同校で演劇部顧問をしながら劇作家としても活躍している。ラジオ劇の脚本などで数々の賞を受賞しているが、自身も俳優として1991年から劇団「弘前劇場」で活躍。2000年から劇作家・演出家を兼任し2005年に退団するが、同年「渡辺源四郎商店」という畑澤の戯曲を上演することを主目的とした劇団を立ち上げている。(「渡辺源四郎商店とは」<http://www.nabegen.com/about.html> 「畑澤聖悟略歴」<http://www.nabegen.com/profile.html> より 2012年1月23日閲覧)

² 2011年10月から12月にかけて、被災地で、無料で演劇をみてもらう被災地応援公演が青森県(八戸市10月28日、青森市11月12日)、岩手県(大船渡市11月26日、釜石市11月27日、久慈市12月14日)、宮城県(気仙沼市11月26日)でおこなわれた。東北ブロック大会で最優秀賞を受賞後、青森市の青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸で、被災地応援公演の報告会と公演がおこなわれた(12月23日)。筆者はこのうち、気仙沼公演、久慈公演、八甲田丸公演を観劇した。

³ 青森県立青森中央高校は1999年全国高校演劇発表大会で優秀賞、2005年と2008年に全国大会で最優秀賞を受賞した。また同年に東奥賞を受賞している。全国高校演劇発表会の常連校として知られている(「畑澤聖悟略歴」2012年1月23日閲覧 <http://www.nabegen.com/profile.html> 『東奥日報』2011年10月

れた演劇である。この演劇が被災地と関わる点は2つある。ひとつは被災地をめぐる公演をおこなったこと、そしてもうひとつが、ストーリー展開の基底に、東日本大震災と「癒し」のテーマがみられることである。まずはこれらの点から演劇を紹介してみたい。

(1)被災地での公演が計算された演劇

被災地での公演を念頭において設計された演劇なので、舞台装置や置き道具、小道具を一切使っていない。また照明や音響など電氣的効果も使用していない。高校野球をめぐるさまざまな場面や高校での出来事が、演じる高校生たちの身体で描きだされ、作り出されていく。たとえば公園の背景にある木などもすべて高校生たちが身体で演じる。また高校野球で応援のトランペットなど、すべての効果音は人が出す声で作りに出されていく。

役者の衣装も黒いトレーナーに黒っぽいジャージ、運動靴というシンプルで、しかも役者全員が皆同じである。それでいて、ストーリー展開と役に応じて、黒いトレーナーが高校野球のユニホームにみえたり、校長先生のスーツにみえたりする。また、何も小道具を使わないのにそこに物があるが如くに演じる生徒たちの演技に思わず、そこに物を見てしまう。何も変化がない衣装に、何も小道具を使わない舞台に、観客の想像が変化や物を見させているのである。

演劇中の役者の立ち位置にも目を見張られる。野球の試合や練習風景が頻繁にでてくるが、投手、キャッチャー、バッター、それに内外野手に審判など、実際の配置や距離が舞台でとれるわけではない。しかし誰が投手でボールがどのように飛んでいたのか。今、どのような試合が展開されているのか。そうしたことが見えるような演技がなされている。それも会場の広さや天井の高さなど、舞台によって違う条件を毎回念頭において、巧みに演技が繰り広げられていく。公演は、場所によってはそれほど広くないところもあった。しかしそうした狭い空間でも、広い野球場での試合を演じ、観客の想像を巧みに誘導していくのである。

試合運びも、均一な時間が流れているのではない。時にはスローモーションでボールと選手が動いていく場面が演じられる。そうしたスローモーションの動作にあわせ、周囲の効果音も、低音に変わる。動きの早さがもとにもどると、周囲の音も普通にもどる。これらの効果音は人が声で作りに出しており、そうした演技が、実際にスローモーションでみているように巧みに描かれていく。

このようにさまざまなところに、被災地での公演が計算された演劇であることをみることができる。

(2)東日本大震災と「癒し」のテーマに登場の「イタコ」

東北ブロック大会と被災地公演が一区切りした12月、青森市にある青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸で公演と報告会が開かれた。ここで劇の脚本を書き、演劇指導をしている畑澤教

諭をはじめ、演劇部員たちの取り組みが報告された。それによるとこの演劇を演じるにあたって、この時期に、この内容の劇を、被災地で演じてよいのかどうか、ずいぶん迷ったといっている。高校のある青森市は大きな被災は免れたものの、毎日報道される被災地の様子を見て、自分たちができることを考えてみたのだという。その結果、演劇で被災地を応援したいということになったのだという⁸。それが青森からのメッセージであることを伝えるためにはどうしたらよいのかを考えた結果、イタコを題材とした演劇が考えられたのだという。

先にのべたように、『もしイタ～もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら』という演劇のタイトルは、岩崎夏海の『もし高校野球の女子マネージャーがドラッグの『マネジメント』を読んだら』(2009)というタイトルを思い起こさせる。岩崎のこの本は、高校野球の女子マネージャーが、本屋で「マネージャー」、あるいは「マネジメント」について書かれた本を探し、店員から「企業経営」について書かれた本を勧められて買ってしまい、野球のことについて書かれていないことを知りショックをうける。しかし、これを野球にとりいれ、甲子園に行くのだとがんばる女子マネージャーと野球部員の青春物語である。畑澤聖悟はこのパロディというもの、話の内容は大きく異なっている。パロディという言葉に私たちは「笑い」を思い浮かべがちであるが、『もしイタ～もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら』には、演劇のなかに、「笑い」を誘う要素がふんだんに盛り込まれている。ベースに東日本大震災と「癒し」というテーマが流れる高校野球部員たちの青春物語であるのだが、その一方で、「笑い」の要素で、被災した人々を元気づける「癒し」の効果をもった応援劇でもある。

主人公のカズサは、被災地から青森に転校してきた高校生。そのカズサを、8人しか部員がいない弱小サイカワ高校野球部の女子マネージャーエリカが勧誘し野球部に入れる。エリカは次にコーチを探し、なんとかイタコのオクザキをコーチに迎えることができた。オクザキは、イタコの「技」、「ホトケオロシ」を使って、チームを強くしていった⁹。地方大会を勝ち進む中、カズサと野球部の仲間たちに友情が芽生えていく青春物語である。最後にカズサは亡くなったかつての野球部の仲間たちと再会し、傷ついた心が癒されていく。

2. 現代的に描かれるイタコのホトケオロシ

(1)演劇にみる「イタコ」のホトケオロシ

『もしイタ～もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イ

⁸被災地に応援を送りたいという部員たちの気持ちは、初回八戸公演での様子を伝えた『デーリー東北』(2011年11月2日)の記事の見出しに表現されている。「被災地にエールを」「八戸皮切り、出張公演開始」である。

⁹劇では「ホトケオロシ」という言葉は使用されていない。また「ホトケ」ではなく「魂」という語が使用されていた。

『イタコ』を呼んだら』の劇中、イタコがどのような存在として描かれているのかに注目してみよう。イタコはストーリー上、重要な役割を担わされている。戦前の大投手沢村栄治の「魂」をおろすのである。現代少年の身体を借りた大投手は、彼の身体を自在に操り、試合をおこなう。その「魂」をおろすために、イタコの「技」が必要だったのである。また別の場面では、被災して転校してきたチームメイトのために、津波で亡くなったかつてのチームメイトたちや家族がおろされ、生者と話を交わすことで癒されている。

演劇で出てくるイタコのホトケオロシは、イタコ自身にホトケがおろされるのではなく、現代少年カズサにホトケがおりており、少年は依り代の役割を果たしている。恐山などでイタコにホトケオロシをしてもらうと、イタコの口を借りて死者が話をするのだが、演劇では、イタコが第三者におろす形式をとっている。そして第三者の身体を借りたホトケが活躍するのである。ここでは、恐山にみるホトケオロシとは少しちがった形でホトケオロシが描かれている。

(2)死者との交流の仕方：シャマニズムとの関係¹⁰

日本のイタコ研究は、柳田国男が、巫女・ミコをめぐる語彙を中心に、日本の民族信仰を究明する視点からはじまった。柳田国男は巫女を神社ミコと口寄せミコに分類したが、その影響は日本民俗学会を中心に、しばらく続いた。1950年代になると日本の巫女はシャマンかという疑問が、堀一郎から提出された(堀 1951:582)。堀はのちにエリアーデの『シャマニズム』(エリアーデ 1981)を日本語訳にするが、1951年の時点でエリアーデの論からイタコはシャマンかという問題を検討し、その結果、シャマンではないと結論付けた。しかしその10年後の1961年、石津照璽はイタコをシャマンとして論じている。石津はイタコが神仏、神霊と交通をもち、神や死者の霊をおろし、口寄せをして託宣をすること。その際、依頼者へは第一人称で語る。イタコは修行の最終段階でトランスに入り、憑霊現象を経験するが、そのとき神がつかぬ者は一人前になれないことから、一人前である者は、神がついた、すなわちトランスになった者だということである。そしてシャマニズムにおいて、シャマンはトランス時に失神や忘我の状態、あるいは脱我、自己転換の状態があることを指摘している(石津 1961:5-7、1969a:3-5、石津 1969b:15-18)。1960年代後半から、桜井徳太郎は、日本各地の巫俗を調査し、イタコをシャーマンとして扱っている(桜井 1968)。桜井は1970年代になると、イタコのトランスの有無などに注目し、イタコには、シャーマニスティック・トランスがみられるとする立場をとった(桜井 1968、1975:533)。

こうしたイタコをめぐるトランスや死者との交流は、演劇ではどのように描かれているのであろうか。次に演劇で降ろされたホトケ(「魂」と降りた身体の関係についてみていく。

(3)現代的に描かれるイタコのホトケオロシ

演劇『もしイタ〜もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら』中に出てくる「イタコ」のホトケオロシでは、イタコが第三者にホトケをおろしている。これに似た事例として 葉山ののりわらがある。のりわらは、東北地方の3-4の村で、村の農作業に関する託宣のため、村の少年か青年を選んで、儀式をおこない、トランス状態にして神霊の憑依をさせる行事で、神の言葉を村人に伝えるのである(石津 1961:5、岩崎 1959:16)。つまり、のりわらの場合、降りた身体を使って託宣をするので、その間忘我の状態になる。この部分、演劇では、野球をすることに変わっていた。しかし、ホトケが憑依している間、すなわちホトケに身体を貸している間、意識がないという設定で、シャマンにみられるトランスの状態がうかがえた。

演劇は、現実にもとづきながら架空の世界を作り出ししていく。そうした架空世界のなかでは、シャマニズムやイタコも、恐山などにみられるイタコとは少し違う形態として、「のりわら」がみられる一方で、「トランス」状態を示すという共通点もある。演劇タイトル同様、イタコやシャマニズムにおいても、現実世界のパロディとして演じられているのである。

最後に：青森メッセージとしてのイタコ

これまで、青森県立青森中央高校演劇部による、東日本大震災によって被害を受けた地域をめぐる「被災地応援公演」について紹介してきた。青森の高校生たちが、青森からのメッセージを発信するとき、「イタコ」という題材は、人々に強く「青森」を印象付ける。イタコを題材とする青森の高校生たちの演劇であることが、人々に違和感なく受け入れられる。つまり青森メッセージとして、イタコがでてくる青森の高校生の演劇なのである。

本稿で、彼らの演劇が被災地と関わる点が2つあることを指摘した。1)被災地をめぐる公演をおこなったこと、2)ストーリー展開の基底に、東日本大震災と「癒し」のテーマがみられること、これら2点である。2)の「癒し」はさらに2つに分類された。a)物語の主人公の被災した心を「癒す」ストーリーであること、b)被災者が、公演をみて笑い、被災者自身が「癒される」こと、この2点である。

青森県立青森中央高校の演劇部が演じる『もしイタ〜もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら』は、2012年の8月には富山で開催される高校演劇部の全国大会へ出場することが決まっている。彼らがいった「東日本大震災に際して、青森からのメッセージを発する演劇」が、全国でどのように評価されるのか、今年、2012年の夏が楽しみである。

¹⁰ 「シャマン」「シャーマン」については、原本にもとづいて記している。原本によらない場合は、シャマンに統一した。

【引用文献】

石津照璽

1961 「東北のおしら」(東北大学文学部『東北文化研究室紀要』3) 1-21

1969a 「東北の巫女探訪覚書―シャマニズムの問題性及び青森県の南部地方のこと―」(1) (『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』9) 1-20

1969b 「シャマニズムの特質と範型―東北地方における事例―」(東洋学会『東洋文化』46-47 合併号) 1-53

岩崎敏夫

1959 「葉山の「のりわら」としんめい巫女」
(日本民俗学会編『日本民俗学会会報』8) 16-19

岩崎夏海

2009 『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』ダイヤモンド社

エリアーデ

1981 『シャーマニズム―古代的エクスタシー技術―』
(堀一郎訳 冬樹社 Eliade, Mircea 1951 "Le Chamanisme et les techniques archaïques de l'extase" Librairie Payot, Paris)

桜井徳太郎

1968 「巫女とシャーマン―日本民族信仰の一試論―」(日本民俗学会編『日本民俗学会会報』43) 1-28

1975 「シャーマニック・トランスの意味」(日本宗教学会編『宗教研究』222) 532-533

堀一郎

1951 「口寄せ巫女へのアプローチ」(『民間伝承』15(12))578-583

柳田國男

1911-1912 「イタカ」及び「サンカ」(『定本柳田國男集』4(1963) 筑摩書房) 473-492

1913-1914 「巫女考」(『定本柳田國男集』9 筑摩書房(1962)) 221-301

Eliade, Mircea

1964 *Shamanism : Archaic Techniques of Ecstasy*. Princeton University Press.

<新聞>

河北新報社

『河北新報』2011年11月24日

デーリー東北新聞社

『デーリー東北』2011年11月2日

東奥日報社

『東奥日報』2011年10月25日

『東奥日報』2011年12月20日

<ウェブサイト>

畑澤聖悟

・「渡辺源四郎商店とは」(<http://www.nabegen.com/about.html>)

2012年1月23日閲覧

・「畑澤聖悟略歴」(<http://www.nabegen.com/profile.html>)

2012年1月23日閲覧

・「渡辺源四郎商店店主日記」

(<http://nabegen4ro.exblog.jp/15765841>)

2012年1月22日閲覧

<演劇>

『もしイタ〜もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら』(畑澤聖悟作)

【謝辞】

本稿を書くにあたって青森県立青森中央高校演劇部顧問の畑澤聖悟教諭、ならびに青森県立青森中央高校演劇部の生徒の皆さまにたいへんお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。